

県民と郷土を結ぶ総合博物館

青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻173号 平成31年(2019)3月15日 Vol.49 No.3

新収蔵 「松木満史」コレクションより



「青森県の素描」のためのスケッチ「岩木山頂」(27×34cm)

2017年の企画展「松木満史展」をうけ、松木ルミ氏(松木満史の三女)から、松木満史の作品及び関連資料が多数寄贈されました。

松木満史(1906年～1971年)は青森県木造町(現・つがる市木造)出身の画家です。桶屋の長男で13歳の時、青森市の仏師のもとに弟子入ります。好奇心旺盛な松木は当時まだ目新しかった油絵に心惹かれていきました。その後、彼は棟方志功という生涯の友でありライバルを得て、ますます芸術の道へのめり込んでいきました。

松木を本格的に洋画の世界に導いたのは、文芸雑誌『白樺』でした。武者小路実篤らが創刊したこの雑誌は、フランスなどヨーロッパの美術を伝える美術雑誌でもありました。

1926年に上京し、1927年国画会に初入選以降、国画会を中心に活動します。1938年に念願の渡仏を執行し、パリの専門学校で素描等を学びます。1年半ほどの滞在で彼が得たものは、印象派の感覚と手法でした。1943年～1944年には従軍画家として北支に派遣されます。

終戦後は、家族と上京しますが、1947年に単身帰省し、青森市の堤川の川べりに小さなアトリエを建てて住みました。ここで精力的に制作しつつ後進の指導にも注力しました。1959年～1960年には、東奥日報紙上に63回にわたり「青森県の素

描」を掲載しました。これらの功績により、第1回青森県文化賞や青森県褒章を受賞するなど、戦後は郷里にとどまり青森県の美術界の中心となって活躍しました。

上の作品は、「青森県の素描」に掲載された「岩木山頂」のために描かれたスケッチの1枚です。墨と絵具で柔らかいタッチで描かれていて、山頂の荒涼とした風景の中で、登頂を遂げ祠に参拝する人々のほっと一息つく感じが伝わってきます。松木によって書かれた、以下の文が絵と共に掲載されています。「せっかくのツイタチ山も 一の鳥居を過ぎたころから 雨が降り出して 難行苦行 途中で引き返すと 笑い話の種にされると 思って 歯を食いしばって登った。頂上は風が強く 寒さにふるえながら、疲労回復を願って 一杯十円のちから水を飲んだ。」寒さに震えながらスケッチしていたのでしょうか。

この絵の他にも県内各地を回って描いたスケッチ類がたくさん寄贈されました。

これらの美術作品と、次ページで紹介する歴史、民俗分野の資料は、4月27日(土)より開催の企画展「新収蔵2019」で展示を予定しております。

(主任学芸主査 中村理香)

江戸から昭和 ～歴史分野新資料～

企画展「新収蔵2019」での歴史分野の主な展示品は、『官板実測日本地図』、浦部劇団関係資料等です。

『官板実測日本地図』は、伊能忠敬らの測量をもとにして、幕末に幕府の開成所から木版で刊行された地図です。樺太から九州を4枚でカバーしており、主要な山が描かれているほか、海岸や主要街道沿いには伊能らの測量の足跡を示す点線が引かれ、それらの線を中心に宿駅等の地名が記入されています。

浦部劇団とは、昭和20～30年代にかけて青森市堤町を拠点にして活動した劇団です。先日、楽屋のれんをはじめとして、舞台背景画・台本・レコード等、大衆演劇に使用されたものが多数寄贈されました。

これらに加え、先日寄贈を受けた、七戸町の米内山家関係資料も紹介します。その中には、青森県内の観光名所など、各地の絵葉書をはじめ、古写本、昭和初めの凶作時の上北郡役所関係資料、錦絵が含まれます。その他、弘前藩の武術師範を務めた斎藤家に伝来していた具足、幕末に製造された日本刀を仕立て直して作られた軍刀、太平洋戦争末期に急造された陸軍部隊の看板、古銭、青森市の実業家の二代目大坂金助が使用したかぼん等を展示する予定です。

(学芸主幹 佐藤良宣)



官板実測日本地図



楽屋のれん

めぐりめぐって ～手作りアイス屋台～

民俗分野の目玉は、青森でおなじみの「チリンチリンアイス」の屋台です。合浦公園（青森市）のアイス売りの草分けとして知られた、木谷ツルさん（大正14年生）が使っていたもので、大工だったツルさんのご主人の手作りです。ツルさんが77歳で亡くなった時、息子さんは処分をためらいました。両親の面影浮かぶ屋台だったからです。

そんな折、屋台を引き継いでくれる女性が現れます。同市の稲部たき子さん（昭和28年生）です。平成13年、稲部さんは副業としてこの屋台でアイス売りを始めました。子どもたちとのふれあいや、時間に縛られない自由さに魅力を感じ、3年後には会社勤めをやめて本業にするまでになりました。定年のないこの仕事を末永く続けたいと考えていた稲部さんでしたが、10年目を目前にしてケガに見舞われ、屋台を引くことが難しくなりました。屋台は再び、活躍の場を失いました。

折しも、アイス売りを始めるために屋台を探している青年がいました。平内町の本堂孝幸さん（平成元年生）です。平成24年、屋台は本堂さんの手に渡ります。好奇心から挑んだアイス売りでしたが、親しくなった同業のおじいさんに学ぶなかで、やりがいと楽しさを知りました。子どもたちや地域の方々とのコミュニケーションが何よりの魅力だったと振り返ります。

そしてこの春——めぐりめぐって、屋台は当館

に寄贈されることになりました。

屋台のアイス売りは世襲が多いため、血縁のない大正・昭和・平成生まれの3人が、3代にわたってひとつの屋台を受け継いだという例は珍しいのではないのでしょうか。伝承のありかたの一例を示していることに加え、同じものが二つとない手作りの道具であること、履歴が明らかで情報が充実していること、地域独特の大衆文化を表象する資料であるという点でも、価値があると考えています。

(学芸主査 増田公寧)



寄贈されたアイス屋台（合浦公園で）

特別展 コロコロ・STONE 職員コラム

9月6日から開催した特別展「コロコロ・STONE - あおもり石ものがたり -」では、県内に分布する石と県内における石利用の歴史を中心に展示を行いました。老若男女問わず多くの方が来場し、ほとんどの方が時間をかけてじっくりと観覧していました。石好きの人が、思っていた以上にたくさんいることがわかった展示会でした。

展示会に興味をもつていただくために、特別に展示したのは隕石でした。青森県には青森隕石と十和田隕石が落下していますが、これまで両方を一度にみる機会はありませんでした。加えて青森隕石は落下時に大きく2つに割れ、その1つは国立科学博物館に展示されていたので借用し、落下から34年ぶりに2つ揃えた形で展示しました。隕石の展示に合わせて、「日本の隕石」という表題の特別講演も開催しました。国立科学博物館で隕石の研究を行っている理工学研究部理化学グループ長の米田成一氏を講師に招き、米田氏が十和田隕石の分析を行った際の話も交え、青森隕石や国内の隕石を中心に、隕石の基本的な知識と隕石を研究する意義について講演していただきました。米田氏は隕石の実物を数種類持参してくださり、参加者はそれらの隕石を観察したり重さを確かめるなど貴重な体験ができたことにも大変満足していたようです。

(学芸課副課長 島口天)



青森隕石（手前）と十和田隕石（奥）を展示したコーナー



約80名の参加者に隕石の説明をする米田氏（写真右奥）

ミュージアム探検隊

「郷土館」、「博物館」などという言葉聞いて皆さんはどんなイメージが湧くでしょうか。「なんだか難しそう・・・」「楽しむというより勉強する真面目なところ・・・」「学校の社会見学では行ったけど普段は・・・」、そんな声も少なくないように思います。確かに、遊園地のようなアトラクションはありませんが、県立郷土館には楽しみながら青森県のことを学べるクイズラリー、「ミュージアム探検隊」があります。例えば・・・

【問題1】（考古展示室から）

下の写真の仮面は、六ヶ所村で見つかった縄文時代終わり頃の土製の仮面です。顔のある一部が曲がっているとされていますが、いったい顔のどこが曲がっているのでしょうか？



青森県埋蔵文化財調査センター蔵

ヒントは、「真ん中」だよ！



しゃこちゃん



ムムム・・・
これはいったい



【問題2】（民俗展示室から）

上の写真の道具、ズバリ何に使うためのもの？

- ①りんごをつかむ
- ②UFOキャッチャーの先につける
- ③頭をマッサージする ④練炭をはさむ

どうですか、結構面白いと思いませんか？もちろん観覧の仕方は人それぞれですが、このようにクイズを通して展示資料を見ることで、難しそうなお内容もわかりやすく楽しく学べ、また気づきにくいことに気づけるメリットもあります。

クイズの参加料は無料、どなたでも参加できます。問題用紙を持って各展示室を回り、最後に3階のわくわく体験ルームで丸つけをしてもらうとプレゼントももらえます。「ミュージアム探検隊」は土日祝日に行っていますが、春休み期間中（3月25日～4月5日）は平日も実施します。

さあ、県立郷土館へGO！

※問題の答え・・・問題1：鼻 ※お祭りやお祈りの道具として使われたと考えられています。このように鼻が曲がっている土面は数少ない貴重なものです。

問題2：④ ※大正時代から昭和にかけて多く使われたようです。レバーを握るとまるでUFOキャッチャーのように練炭をはさむことができます。

(研究主査 福土道太)

青森県立郷土館

県民と郷土を結ぶ総合博物館

二〇一九年度

年間行事予定



2019年4月27日(土)～7月1日(月)

企画展 新収蔵2019



2019年7月13日(土)～8月25日(日)

TTHAグループ主催 「森のささやきが聞こえますか」
倉本聰の仕事と点描画展

2019年9月12日(木)～11月4日(月・祝)

特別展 ひらく・つくる・みのる
—青森の湿地と稲作のはなし—



2019年11月15日(金)～11月24日(日)

TTHAグループ主催 第87回 東奥児童美術展



2019年12月7日(土)～2020年1月30日(木)

企画展 縄文遺跡群と県立郷土館
—発掘調査の軌跡—



2020年2月14日(金)～2月24日(月・祝)

TTHAグループ主催 第9回 東奥児童書道展



その他事業

- 土曜セミナー
- ミュージアム探検隊(土日祝日・春休み期間)
- 郷土館クイズラリー(夏休み・冬休み期間)
- 自然観察会(6/23・10/6)
- 夏休みこどものくに(7/21・8/11)
- 授業に役立つ博物館研修(8/2)
- 博物館実習(8/26～30)
- あおり街かど探偵団(6/29・10/12)
- 冬休みめぐりまわし大会(1/5)
- 出前授業・移動博物館・講師派遣事業(随時)

◇無料開放日◇

- 5/1～5(2019GW)
- 5/18・19(国際博物館の日)
- 10/26・27(東北文化の日)

◇休館日◇

- 4/26 7/2・12 8/26 9/11
- 11/5・14・25 12/6 12/29～1/3
- 1/31 2/13・25 3/11～18

◇開館時間◇

- 4/1～4/25 11/6～3/31
- 9:00～17:00
- 4/27～11/4
- 9:00～18:00

◇常設展観覧料◇

区分	3～12月	1・2月
一般	310円(250円)	250円(200円)
高校・大学生	150円(120円)	120円(100円)
中学生以下	無	料

- ()内は20名以上の団体料金。
- 障がいのある方は免除。
- 特別展の料金は、直接お問合せください。

◇交通機関◇

- JR青森駅より徒歩約20分
- 市営バス JR青森駅から
- 国道経由
NTT青森支店前
(または市役所前)下車、
徒歩約8分
- 新町経由
新町二丁目下車、徒歩約8分
- 市民バス JR青森駅から
- 青柳線
本町二丁目下車、徒歩約1分

